



火災現場を再現した施設で本番さながらの消火訓練



高所からの降下訓練。「降下準備よし!」と声を掛け合う

百聞は一見に



訓練後に記念の1枚。訓練を重ねるごとにきずなが深まった

02年からJDR医療チームの一員として職員が活躍している。そしてJDRだけでなく、松阪消防の技術を生かし、職員一人一人がかかわれる協力的にじっくりと取り組むたいと、02年からはJICA草の根技術協力事業を通じて、フィジー国家消防庁から研修員を受け入れることに。日本とフィジー、使用する資機材は違っても消防技術の基本は同じ。ホースの伸ばし方や放水の手順、はしごのかけ方から、山や川、交通事故にあった車両での救出方法などまで、年一回約2か月かけて学んだ。

しかし、松阪消防にとっては初めての海外からの研修員受け入れ。最初は、試行錯誤の連続だった。文化の違いからか、時間が厳守できなかったり、チーム内での連携がうまくいかなかったり、さまざまな苦労があった。「決められた時間に集合し、隊長の命令で整列して訓練を開始する。消防士として欠かせない。規律を一から指導しました」と消防救急課の東出直明課長は振り返る。言葉や文化が違っても同じ消防士。時間を共にすることで、次第に分かり合えるようになっていった。

日本からフィジーへ現場での直接指導

研修員の受け入れを進めているうち、「フィジーに足を運び、もっとたくさん消防士に技術を教えたい」という声が松阪消防の職員から上がり始めた。そこで06年からは年一回、松阪消防の職員2人がフィジーに行き、1カ月かけてみっちり技術指導を行うようになった。日本で研修を受けた消防士たちが着実に技術を普及できるよう、指導者研修にも取り組み始めた。

さらに07年の研修からは、消防の中でも水難救助に特化するようになった。フィジーは雨期になると、河川の氾濫による洪水被害が多発するため救助の要請も多い。ボートやロープなどを使い、本番さながらの状況で何度も繰り返し訓練が行われた。「限られた期間の中で、できる限りの技術を学ぼうとしているのを感じます。私たちも気が引き締まります」と消防救急課の岡山雅史さんは話す。

また、フィジーではこれまで民間が管轄していた「救急業務」が消防に移管されたことを受け、2010年から松阪消防と共に救急活動の基本を学んでいる。心肺蘇生、三角巾を使った傷の手当て、担架による搬送など、学ぶべき技術は盛りだくさんだ。そして、松阪消防の支援は単なる「訓練」では終わらない。実際に現場で技術を発揮できるように、最後には総合的なシミュ



フィジーの人々の前で水難救助の研修成果を披露

レーションを行っている。手探りでフィジーへの協力を始めて10年。フィジーと松阪、互いに切磋琢磨しながら消防技術のレベルアップを図ってきた。「数年前に松阪消防の研修を受けた人が署長になっていたり、松阪での写真を大切に持っていてくれたり。日本は第二の故郷と言ってくれる人もいてうれしい」と岡山さん。フィジーに消防技術を発信することは、松阪消防の消防士たちの自信にもつながっているという。

「フィジーでの経験を生かし、他のアジアの国にも技術を伝えていきたい」という松阪消防の消防士たち。百聞は一見にせず。これからも自らの手と足を使って、途上国に消防技術を伝えていく覚悟だ。

しかずの消防技術

「国際貢献」を市の方針の一つに掲げる三重県松阪市。これを体現しているのが松阪地区広域消防組合消防本部。日本の消防技術を開発途上国に伝えるべく、10年にわたり、フィジー国家消防庁への協力を続けている。

[三重県] 松 阪 市

地域と世界の
きずな
27



松阪地区広域消防組合 消防本部

管内面積767.86Km²。管内人口20万6,288人。三重県の松阪市、多気町、明和町という伊勢湾岸部から奈良県境の山間部にわたる広大な地域を管轄している。その大部分を占める松阪市はかつて商人の町として栄えており、今でも県の経済拠点として位置付けられている。日本最高級の牛肉ブランド「松阪牛」の生産地としても有名。「国際貢献」を市の方針として掲げ、10年にわたってフィジー国家消防庁への技術協力に取り組んでいる。



松阪地区広域消防組合の職員の指導の下、放水訓練をするフィジーの消防士たち

まちぐるみで 国際貢献に取り組む

「しっかりとロープを結んで!」
「時間がない! 20秒!」
「そこ、結び方が甘いぞ!」
火災や事故が発生した時、サイレンを鳴らしながら現場に駆け付ける。私たちの身に起こりうる、もしもに備えて、日々訓練を重ねている消防士たち。出動先では、いつ何が起るかわからない。あらゆる資機材を使いこなし、どんな過酷な状況にも対応しなければならぬ。すべては市民の命を守るため。

そしてその思いを、海外にも発信している消防本部がある。三重県の松阪市、多気町、明和町を管轄する松阪地区広域消防組合消防本部(以下、松阪消防)。職員数は275人で、全国の自治体の消防本部の中ではそう規模は大きくない。しかし大釋博消防長の指揮の下、その技術は海を越えて、大洋州に浮かぶ国フィジーに渡っている。

きっかけは2001年、当時の松阪市長が「国際貢献」を市の方針の一つとして掲げたこと。これを受けて松阪消防も、消防技術を使った国際貢献の道を模索していた。「最初は国際緊急援助隊(JDR)の救助チームを考えたのですが、登録に必要な職員の数に足りませんでした」と松阪消防の野呂敏弘次長は話す。そこで行き着いたのがJDR医療チームへの参加。消防士の資格の一つである救急救命士として、